

## 理論研究科目「日本語教育学方法論」

李 在鎬・小林 ミナ

## 要 旨

「日本語教育学方法論」は、日本語教育を研究する上で必要な方法論や研究の留意点を学ぶための科目であり、修士課程の必修科目である。2020年度春学期が最初の開講年度であったが、コロナ禍により、オンライン化せざるを得なくなり、相互評価の仕組みを取り入れた授業デザインを行った。この授業デザインを Online Collaborative Learning (OCL) モデルから評価し、今後の課題を明らかにする。

## キーワード

必修科目 相互評価 Online Collaborative Learning (OCL)

## 1. はじめに

「日本語教育学方法論」は日本語教育を研究する上で必要とされるさまざまな研究の方法論や留意点を学ぶ科目である。特に科学研究を支える基本的な要素や方法論を学ぶとともに、研究論文執筆のための基本的な考え方、手法を身につけることを目的にしている。

本科目の位置づけを把握するためには、2つのポイントを抑えておく必要がある。1) 2020年度に新設された科目であること。2) 修士課程の必修科目であること。これらのポイントは、本特集に掲載されている「日本語教育学入門」と同じ位置づけを持っており、修士課程における基盤形成のための科目である。なお、履修時期は修士の2学期目を標準にしている。修士の1学期目に学ぶ「日本語教育学入門」で日本語教育学の全体像を把握し、2学期目の「日本語教育学方法論」で研究の具体的な進め方を学ぶという想定である。

以下では、対面授業を想定した通常時のシラバスと授業運営について述べた後、どのようにしてオンライン化したかについて述べる。なお、この科目は、初年度からオンライン授業であったため、対面授業での様子が把握できていないという限界があることに注意してほしい。

## 2. 通常時のシラバスや授業運営

本科目の到達目標は、「科学研究を支える基本的な要素（観察、記述、分析、説明、一般化）や方法論（定性的方法、定量的方法、混合的方法）を学ぶ」ことである。対面授業を前提にした授業デザインでは、事前学習として「授業前には、担当教員から指示された課題（文献講読、資料収集など）に取り組む」ことを求めている。事後学習として「授業

後には、授業の振り返りをWaseda Moodleに提出する」ことを求めている。シラバスに掲載した授業計画は以下のとおりである。

- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| 1. 科学研究を支えるもの     | 7. 論文の骨組みの作り方          |
| 2. 科学研究と日本語教育学    | 8. 「経験・興味・関心」から「研究課題」へ |
| 3. 言語研究の方法と日本語教育学 | 9. 「研究目的」と「リサーチクエスト」   |
| 4. 教育研究の方法と日本語教育学 | 10. 「先行研究」とは何か         |
| 5. 社会研究の方法と日本語教育学 | 11. 「論理的に考える」ということ     |
| 6. 論文とは何か         | 12. 「事実」と「解釈」を書き分ける    |

上述の授業計画は、授業で取り上げる予定のトピックを羅列したもので、前半の1～6は李在鎬が担当し、後半の7～12は小林ミナが担当した。成績評価は以下の2つの観点で行うことにした。

1. レポート (50%)：指定されたトピックで期末レポートを作成します。その内容、構成、形式を評価の対象とします。
2. 平常点評価 (50%)：事前課題や授業での活動にきちんと取り組んでいるかどうかを評価の対象とします。

### 3. 授業開始前に行った準備や想定していたこと

オンライン化に際し、まず、学生に対する事前ガイダンスで以下の点を伝えた。

1. 何を学ぶ：日本語教育を研究する上で必要とされるさまざまな方法論や留意点を学びます。
2. 誰が・誰に：前半は李在鎬、後半は小林ミナが担当します。日研生の修士学期目の学生をメインターゲットにして講義します。3学期目、4学期目も歓迎します。
3. いつ：春学期（5月11日～8月2日）、木曜日2限
4. どこで：Waseda Moodle上で講義します。
5. どうやって：事前学習として文献を読み、教員から出される課題に答えます。授業時間には、オンラインシステム上で説明を聞いたり、参加者同士でディスカッションをしたりして、理解を深めます。
6. なぜ：方法論の重要性を認識した上で、自身の研究計画を根底から見直すきっかけにしてほしいから開講します。

オンライン化という観点からは、5の「どうやって」の部分がポイントになるであろう。5の方針を決める上で、次の点を意識した。いわゆるオンデマンド型の授業でよく見られる受身型の授業、すなわち画面上でコンテンツが流れて、履修生は受身的にコンテンツを見るだけの授業は避けなければならないと考えた。そのため、ガイダンスの時点で、「参加者

同士でディスカッションをしたりして、理解を深める」という点を伝え、相互評価による学び合いを強調した。授業計画については、前節で取り上げた12のトピックをすべて扱った。

#### 4. 授業開始後に起こったこと

本節では、授業開始後に行ったこと、起きたこととして3点を報告する。1) Waseda Moodleでのコンテンツ運用について述べたあと、2) 履修生同士の相互評価がどのようになされたかについて述べる。3) そして、教科書と計画変更について述べる。

##### 4.1 Waseda Moodleの設定

まず、Waseda Moodleでのコンテンツ運用方法について述べる。この点に関しては本特集の「言語コーパス論」(本誌のP.25参照)に記載したものと同様の方針で行った。図1に具体例を示す。



図1 Waseda Moodleの設定例

図1は本科目の講義2で実際に使用したコンテンツである。最初のコンテンツとして「講義の進め方」というページコンテンツを用意した。このコンテンツでは、いつまでどんなタスクを行うのかを明記した。実際に使用した「講義2の進め方」を図2に示す。

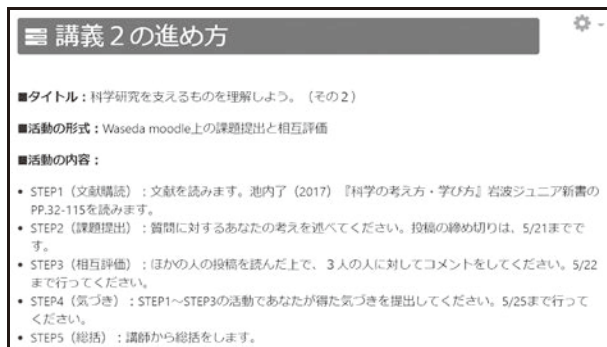


図2 講義の進め方の例

「講義の進め方」の中には、講義のタイトル、使用するリソース(論文の書誌情報)、各STEPの学習方法を書いた。

「講義の進め方」の中には、講義のタイトル、使用するリソース（論文の書誌情報）、各STEPの学習方法を書いた。

#### 4.2 相互評価について

本科目のオンライン化のポイントである相互評価について述べる。図3は、講義2で履修生たちが実際に行った活動の例である。担当教員からWaseda Moodleのフォームで「観察、記述、説明、とはどのような営みだと思いますか。自分の研究テーマに合わせて、この3つの営みについて具体的に説明してください。」という質問をし、4名の履修生がそれぞれの意見を書いた（図3）（図中の黒塗りは履修生の個人名）。

ディスカッション	ディスカッション開始	返信	未読	最新の投稿 ↓	作成済み
☆ 日本語教育研究方法論（春）第2回課題 [黒塗り]	[黒塗り]	6	0	[黒塗り] 2020年 05月 25日 (月) 18:40	2020年 05月 21日 (木) 08:46
☆ [黒塗り] 講義2課題提出	[黒塗り]	4	0	LEE Jeaho 李 在錫 2020年 05月 23日 (土) 18:33	2020年 05月 20日 (水) 16:58
☆ 第二回課題提出 [黒塗り]	[黒塗り]	4	0	LEE Jeaho 李 在錫 2020年 05月 23日 (土) 18:26	2020年 05月 21日 (木) 16:52
☆ 日本語教育研究方法論（春）第二回課題 [黒塗り]	[黒塗り]	5	0	LEE Jeaho 李 在錫 2020年 05月 23日 (土) 18:17	2020年 05月 21日 (木) 12:03

← 講義2の進め方      ジャンプ...      STEP4 (気づき) ▶

図3 課題提出と相互評価の例

図3から4名の履修生が自身のスレッドを立てて、課題を提出していることが確認できる。そして、返信数からも確認できるように、1人の受講生の投稿に対して、4～6件の（返信の）投稿が入っている。フォーラムでの相互評価は、履修生同士が行うという前提であるが、議論の方向性や追加してほしい視点がある時には、担当講師も返信した。

図3の相互評価の次のSTEPとして、相互評価を通して学んだことを「気づき」として投稿してもらった。これは、いわゆる学習の振り返りに相当するフェーズであり、振り返りの内容については、教員が確認をし、全員に必ずフィードバックをするようにした。

#### 4.3 教科書と計画変更について

本科目では、教科書は定めず、主たる参考書として以下の3冊を指定していた。

1. 池内了（2017）『科学の考え方・学び方』（岩波ジュニア新書）岩波書店
2. 野矢茂樹（2001）『論理トレーニング101題』産業図書
3. APA（2018）『APA論文作成マニュアル第6版』医学書院

しかし、大学等の図書館が使えない状況で、毎回の授業で異なる参考書や文献が紹介されることについて、履修生が戸惑う様子が学期前半に見られた。そこで、後半では上記2.を教科書に切り換え手元に置くように指示し、当該書に沿うような形に計画を変更した。

## 5. おわりに (考察、日本語教育領域への示唆など)

オンライン授業は、その基本構造としてコンピュータに向かって勉強するという方法であるため、履修生は孤独になりがちである。こうした孤独感は学習意欲の低下につながると考え、相互評価や講師によるフィードバックを積極的に行った。こうした考え方はいわゆる「オンライン協調学習理論」(OCL: Online Collaborative Learning) (Bate 2015) によるものである。OCLの段階として、Bate (2015) では、3つの段階を指摘している (Bate 2015: <https://opentextbc.ca/teachinginadigitalage/chapter/6-5-online-collaborative-learning/>)。

1. **idea generating:** this is literally brainstorming, to collect the divergent thinking within a group;
2. **idea organising:** this is where learners compare, analyse and categorise the different ideas previously generated, again through discussion and argument;
3. **intellectual convergence:** the aim here is to reach a level of intellectual synthesis, understanding and consensus (including agreeing to disagree), usually through the joint construction of some artefact or piece of work, such as an essay or assignment.

1はアイデアを生成する段階、2はアイデアを整理する段階、3は知識の統合する段階である。本科目のSTEPと対応づけた場合、まず、「1. idea generating」は(図1・2の)STEP2とSTEP3の課題提出と相互評価の活動である。次に、「2. idea organising」はSTEP4の気づきの活動である。最後に、「3. intellectual convergence」はSTEP4とSTEP5の活動である。

次学期に向けての課題として、STEP5が講師による一方的な情報発信になっている点は、見直しが必要と考えている。

## 参考文献

Bates, A.W. (2015) *Teaching in a Digital Age: Guidelines for designing teaching and learning*. BCcampus (OpenTextbook: <https://opentextbc.ca/teachinginadigitalage/>) (2020.8.25.閲覧)

(り) じえほ 早稲田大学大学院日本語教育研究科  
(こ) ばやし みな 早稲田大学大学院日本語教育研究科